大学生における困窮事態の分類と構造化

山村 麻予（大阪大学 未来戦略機構第一部門，yamamura@cbi.osaka-u.ac.jp）
真下 知子（京都文教短期大学 幼児教育学科，mashimo@po.kbu.ac.jp）
三宮 真智子（大阪大学 大学院人間科学研究科，sannomiya@hus.osaka-u.ac.jp）

The classification of situations the university students feel distressed

Asayo Yamamura (Institute for Academic Initiatives, Osaka University, Japan)
Tomoko Mashimo (Department of Early Childhood Education, Kyoto Bunkyo Junior College, Japan)
Machiko Sannomiya (Graduate School of Human Sciences, Osaka University, Japan)

Abstract

The purpose of this study was to collect data on the situations under which university students feel distressed, and to arrange these situations based on three characteristics. First, as a pilot study, 20 undergraduate university students (average age of 19.45 years, *SD* = 1.36) responded to the questions “In what kinds of situations do you feel you experience difficulties?” and “What are your troubles in daily life?” by filling out an open questionnaire. As a result, we collected data on 172 situations and they were classified into five categories: human relationship, losing thing, study, private affairs and environment. Second, as the main study, 208 university students (average age of 19.14 years, *SD* = 3.12) replied to a questionnaire. For each of 42 items selected from the results of the pilot study, the students answered questions about three items: frequency of experiencing troubles, the degree of feeling distressed, and the degree of desire for assistance. Based on factor analysis, we found four factors: interpersonal relations, communication skills, studies and daily routines. The factors also display different characteristics. The students answered under “daily routines” that such occurrences as “I forget my umbrella on rainy days” often occur, but situations such as “I cannot say what I want to say to people” under “communication skills” do not happen too much. The findings suggest that there are various situations in which university students feel distressed in daily life. Undergraduate students have various difficulties, and in addition, the kinds of prosocial behaviours (assistance, helping and so on) that arise are numerous. Previous studies in Japan have conducted research on secondary and tertiary students suffering from mental disorders, but this study focuses on the healthy university students and their school life.

Key words

the situations under which university students feel distressed, helping behavior, assistance, undergraduate students, questionnaire

1. 問題

1.1 はじめに

近年、「人助け」や「思いやりのある行動」といった他者に対する行動に焦点を当てた議論が盛んに行われている。他者または他の集団のためを思い、行動を示すことは非常に重要であるといえる。谷口（2012）によると、他者を援助することで、自分が相手にもっている好意を伝え、関係性がより親密になることを指摘しており、社会生活を営む上で、援助行動を示すことによるメリットは大きい。他者に対する援助には、災害地でのボランティアや臓器移植といったものから、学業面で行き詰まっている仲間への教授行動や、悩みを抱えた人へのサポートなど、日常的なものまで幅広く含まれる。つまり、援助を含む行動が対象とする他者や集団、またそのような人々がいる状況も多様であるとも考えられる。われわれの日々の生活においても、電車内で立ったままのお年寄りや、道端で荷物を落としてしまった人など、何らかのトラブルや課題を抱えている他者は多数存在している。

日常生活においても、課題に行き詰まったり、うっかりミスをしたりと、困っている他者は少なくない。先行研究では、このような「困っている人」、つまり、ある物事をどう処理したらいいのか悩んだり、取扱いに行き詰まったりして困っている人のことは「困窮者」（竹ノ山，2005）と表現されてきた。さらに、そのような困窮者が生起している状況については「困窮場面」（伊藤，2006）や「苦境場面」（上原・青柳・釘原，2011）と表している。また、上記のとおり、多くの場合、「困る」と「悩む」は区別されない。そこで、本研究でも、先行研究と同様に、困っていたり悩んでいたりする人を「困窮者」とし、困っている事柄やその内容は「困窮事態」と表すこととする。本稿において「困窮者」「困窮事態」として表すのは、物事の解決に苦しんでいる人、そしてその事態であるとし、他者からの援助を実際に受けた人を示す「被援助者」（松浦，2006）は困窮者に包含される。

1.2 困窮者への対応に関する研究

心理学では、このような困窮者に対する行動を含め、他者またはその集団の利益のために自発的に行われる行動は向社会的行動（Eisenberg & Mussen, 1989）として研究が行われてきた。向社会的行動と類似した概念として、純粋に相手の利益を目的として行われる愛他（利他）行

動や、手伝いや介入を示す援助行動、具体的な行動に限らない配慮なども含む支援行動などがあるが、これらはほぼすべてが向社会的行動に含まれる。これまで、向社会的行動については、意義深い研究が多数行われてきた。たとえば、どんな人が向社会的行動をとることが多いのかといった問いに対しては、共感性の高さが関係していることが指摘されている（桜井，1986）。また、人はなぜ向社会的行動をとるのかといった点については、宗方・二宮（1985）が道徳的判断水準（Eisenberg, 1979）に基づいて検討を行い、年齢の発達に応じて、困窮者に対する行動を示す理由が、「ほめられたいから」などといった利己的なものから「相手がかわいそうだから」といった利他的なものへと変化していることが示唆されている。

また、高木（1987）は、順社会的行動（向社会的行動と同義）にどのようなものが含まれているかの分類を行っており、けが人や病人などへの対応といった応急処置や、子どもや老人などへの社会的弱者への援助など、その多様性を指摘した。このことは、その行動が生起する状況が緊急性の高いものから低いものまで多岐にわたること、さらに、向社会的行動を受ける困窮者および困窮状態に陥った原因がさまざまであることを示しているといえる。

このように援助行動や親切行動を含む向社会的行動に関する研究知見は、心理学分野において多く蓄積されている。また、それらの行動を受けた側、つまり、被援助者についての研究もいくつか見られる（松浦，2006 など）。しかし、援助行動が生起する前提である、どのような場面で、どのようなことに対して困り、悩んでいるのかを明らかにした研究は、心理学分野ではほとんど見当たらない。つまり、向社会的行動が生起したか生起していないかに関わらず、困窮者や困窮事態そのものに着目した研究は少ないのである。これに対して、現代社会の抱える問題である貧困に関する社会学・公共政策といった視点からの研究や、少子高齢化に応じた社会福祉についての研究においては、困窮者が何に困っているのか、どのような状況に陥っているのかといった状況、内容、さらにはその対応策についての検討が行われている。このような社会的課題となりつつある、または既に課題となっているものについては多様な側面からのアプローチが行われている一方で、いわゆる一般的な日常生活において生起する、経済・福祉的な意味合いに限らない、幅広い主観的な困窮事態については、ほとんど焦点があてられてこなかった。このように、困窮者に対してどのように対処すればよいかといった視点からの知見が積み重ねられるものの、人はどのようなときにささやかでも困ったなと感じているのか、また、それはどの程度生起するのかという根本的な問いについては明確な知見は得られていない。

1.3 大学生を対象とした困窮事態研究の必要性

人が困ったり悩んだりしている困窮事態が、具体的にどのようなものかについて明らかにすることは、非常に重要である。それは、困窮事態そのものについて、その実態を明らかにすることで、周囲の人間が援助する場面をより明確にすることが可能となるためである。

なかでも現代の若者は他者とのコミュニケーションに対して苦手意識を有していることが指摘されている（三宮，2004）。他者から自立し、自発的な援助行動や援助要請行動が必要となる青年期において、コミュニケーションに対する苦手意識が強いと、他者との適切な関わりの障壁となることが考えられる。また、一般的な進学ルートとなりつつある高校から大学への移行によって、不本意就学や環境変化、複雑化する学習内容への困難感や多様化する関係性、経済的問題の増大など、現代の大学生をとりまく困窮事態は多くあると指摘されている（庄司，2011; 千島・水野，2015 など）。そこで、本研究では大学生に焦点を当て、検討を行う。彼らの困窮事態の実態を知ることは，彼らへの適切な支援を検討するうえで意義深いと考える。どのようなことに困り、どのように感じているのかを明らかにすることで、困窮に対する効果的な対処を検討することが可能となり、また、同様に彼らが困窮事態のなかにある他者に遭遇したとき、このような援助を必要としている人や集団に対する不適切な行動を回避し、適切な行動を生起させることが可能となるだろう。

一方、これまでの向社会的行動研究において、向社会的行動尺度を用いた検討（横塚，1998）や、場面想定法による質問紙研究（伊藤，2004）が行われてきたが、その多くは「困っている人がいたら」という前提に基づき、さらに援助者側に焦点を当てている。しかし、困窮者側の視点に立ち、人はどのようなことで困っているのかという検討はほとんど行われていない。実際場面に即した研究を行う際、困窮事態について詳細に調べることは重要であると考えられる。これまで、大学生の困窮事態そのものに焦点を当てた研究は少なく、高井（2008）は人間関係に関する悩みに限定した調査を行い、その内容を分類している。しかし、大学生が悩む事態は、人間関係に限らないため、十分とは言い難い。また、困窮事態には「悩み」以外にもさまざまなものがあり、「困っていること」全般に焦点を当てる必要があるだろう。また、ほかにも被援助者側である「助けられる人」に焦点を当てた研究として、実際に「助けられた」経験を問う被援助事態（相川，1989）についての検討や、援助してくれるよう他者に求める援助要請行動に関する研究（野崎・石井，2004）がある。このような観点からの検討は行われているものの、実際の困窮事態では、「困ったけれど助けてもらえなかった（または、助けが不要であった）」などの被援助事態に含まれないものや、「困ったけれど助けを求めなかった（または、求めることができなかった）」といった援助要請行動まで至らなかったものもあると考えられ、本研究で定義したような、より広義の困窮事態そのものに関する検討が必要である。

1.4 困窮事態の性質

さて、困窮事態といっても非常に幅広く、先に述べたような被援助事態に発展するものや、援助要請行動を生起させなければならないもの、つまり、自分一人では解決できないもの、また自己解決が可能であるものも想定

される。さらに、困窮しており、援助を必要としているものの、何らかの事情で助けを求められなかったり、他者から手助けを得られなかったりする事態が存在している可能性も否定できない。つまり、困窮事態にもさまざまな性質があると考えられるのである。さらに、ある一つの事態について、自分自身が「困っている」と思っていても他者からはそう見なされないもの、またその反対に他者が困っているに違いないと認識しても自分自身はそのように感じないものというように、主客の認知が一致しない事態も考えられる。本研究では、困窮事態に関する研究の第一段階として、まずは自己の認識に着目し、本人が「困っている」と感じた場面に限定する。

本研究では、困窮事態の性質を表すいくつかの側面として、野﨑・石井（2004）を参考に、困窮事態の経験頻度、困窮度、そして援助希求度の 3 つを採用する。経験頻度として、日常生活でどの程度頻繁にそのような事態を経験したかを測定する。収集された困窮事態が、普段から多く生起するものであれば、自他がそれに対処する必要性が高いと判断できるためである。また、困窮度は困窮の度合いを示す。困窮の程度を示す指標を測定することにより、対処行動である援助や支援の緊急性などに対応することが想定されるためである。そして、援助希求度は、その困窮事態において他者からの援助をどの程度希求しているのかという側面である。他者から援助してほしいと感じる事態かどうかといった点から困窮事態を整理することで、困窮者の意思を反映した援助を考える一つの指標とすることが可能となる。このような 3 つの側面を設定し、それぞれの困窮事態がどのような性質を持っているのかを明らかにすることによって、大学生における困窮事態の特徴を検討する。

1.5 本研究の目的

本研究の目的は、大学生の日常生活に起こりうる困窮事態の収集およびその分類である。具体的にどのような困窮事態があるのかをまず予備調査で収集する。そして、頻度、困窮度、援助希求度といった側面から、収集された困窮事態を性質によって分類および構造化を行う。日常生活において、彼らが遭遇しうる困窮事態について収集・分類を行うことにより、友人間の円滑なコミュニケーションの発展や、教職員および相談室などの関係機関が、適切な援助を行うための一助となることが期待される。

2. 予備調査

2.1 目的

大学生が、日常生活で「困った」と感じている事態を自由記述式の質問紙によって収集する。

2.2 対象

近畿圏内の大学および短期大学に通う学生 20 名（男性 3 名、女性 17 名）。平均年齢 19.45 歳（SD = 1.36）。この調査の対象は、女性を中心に協力を求めた。これは、女性は男性に比べて向社会的行動を多くとることが多くの研究で示されており（金子・田村，1998 他）、自他の困窮事態に対して敏感であることが考えられるためである。

2.3 倫理的配慮

表紙に、得られた回答は個人が特定されない形で処理されること、学校や講義の成績とは関係がないこと、研究目的にのみデータを利用することを記載し、内容に同意した者は回答に移ることを求めた。

2.4 質問紙構成

回答者は学年、年齢、性別をフェイスシートに記入したのち、以下の質問に対し、自由記述で回答した。

「あなたの、『困ったこと』や『友人に助けてほしいなぁと思ったこと』、『悩んだこと』や『話を聞いてほしいなぁと思ったこと』の経験をおたずねします。実際に、だれかに助けてもらったかどうかは関係なく、お答えください。（困ったなぁと思ったけれど、他者に手伝いを頼まなかった・助けられなかったこともお書きください）」

この教示に続き、①授業中または前後、勉強に関すること、②人間関係、③上記以外でのことの 3 つの回答欄を設定した。大学生は、就職や進路、情緒問題、修学面での問題、対人関係の問題についての悩みを経験するものが多いという指摘（平井，2001）から、どの学年も経験する可能性があり、身近に感じやすいであろう「修学面での問題」と「対人関係の問題」の 2 つについて、回答欄を別に設けた。また、人間関係や勉強に関すること以外にも、困窮事態が生じている可能性を考え、「その他」の回答欄を設けた。

2.5 手続き

個別に質問紙を配布し、表紙に書かれた調査に関する説明および質問紙内容についての解説を口頭で行ったうえで、回答を求めた。実施時期は 2012 年 10 月から 11 月であった。回答にかかった時間はおよそ 15 分程度であった。

2.6 結果と考察

得られた事態の総数は 172 件であった。今回の調査では、男性 3 名に対し、女性が 17 名と偏りが見られるサンプルでの検討となった。回答の記述から確認されたなかには大きな差異は見られず、男女込で分析することに問題はないと判断した。

調査者を含む 3 名が行った KJ 法に類似した手法による分類の結果、第一段階では 50 カテゴリーが抽出された。さらに分類を繰り返し、第二段階として 22 の二次カテゴリー、第三段階として 10 の三次カテゴリーに分類され、最終的に 5 つに集約された。具体的には、恋人や友人、家族との葛藤などが含まれる「人間関係の問題」（64 件）、学業場面において予習の不足や欠席などによる「学業の問題」（39 件）、授業に必要な物や財布などの「忘れ物・落し物の問題」（31 件）、怠慢や利己的な原因による「個人的な問題」（29 件）、環境不備など自力での改善が難

しい「物理的環境の問題」（11 件）にまとめられた。

3. 方法

3.1 本調査の目的

予備調査で得た代表的な困窮事態について、その経験頻度や困窮度、援助希求度といった点から分類を行う。

3.2 対象

近畿圏内の大学および短期大学に通う 208 名（男性 95 名、女性 113 名）。平均年齢 19.14 歳（*SD* = 3.12）。

3.3 倫理的配慮

予備調査と同様、表紙に得られた回答は個人が特定されない形で処理されること、学校や講義の評価とは関係がないこと、研究目的にのみデータを利用することを記載し、さらに、実施した第二著者によって読み上げたうえで、内容に同意した者は回答に移ることを求めた。

3.4 質問紙構成

本調査には、予備調査で得られた代表的な 50 カテゴリーのうち、アルバイトやサークル活動、一人暮らしなど誰もが遭遇しうるとは言い難い 8 つの困窮事態を除き、表現に修正を加えたうえで、ほとんどの大学生が経験している可能性がある 42 項目の困窮事態を選定した。回答者は、この 42 項目について、以下の 3 つの性質について評定を行った。

(1) 困窮事態の経験頻度（以下、頻度）「今までの大学生活で、以下のような経験は、どれくらいありましたか」という教示を行い、「よくあった (5)」から「まったくなかった（1)」の 5 件法で回答した。
(2) 困窮の度合い（以下、困窮度）「あなたは以下のような状況になったとき、どのくらい困りますか」という教示に対し、「とても困る（5)」から「まったく困らない（1)」の 5 件法で回答した。
(3) 援助を希求する程度（以下、援助希求度）「あなたは以下のような状況になったとき、周囲の人に、助けてもらうことや話を聞いてもらうことを、どのくらい求めますか」と教示し、「とても求める（5)」から「まったく求めない（1)」の 5 件法で回答した。

3.5 手続き

調査は、集団実施された。調査に関する事項について表紙に明記し、実施者が読み上げたうえで、内容に納得できた場合のみ回答するように教示した。回答に要した時間はおよそ 15 分であった。実施は 2013 年 1 月であった。

4. 結果

4.1 分析対象

回収された質問紙のうち、途中から白紙となっているものや、一つの問いに対して 42 項目すべてに同じ回答をしている者を不備とみなし、分析から除外した。その結果、分析の対象は 198 名（男性 88 名、女性 110 名）、平均 19.10 歳（*SD* = 3.17）となった。以降のデータ分析については、IBM 社の SPSS19 および Amos19 を使用した。

調査項目で用いた困窮事態は、性別の偏りが大きいサンプルから収集されたものであったため、それぞれの事態を経験した頻度などに性差がないか、性別を独立変数とした *t* 検定によって確認した。その結果、42 項目中、有意な性差が確認されたのは、頻度で 6 項目、困窮度で 7 項目、援助希求度で 6 項目であった。このように、ほとんどの項目で性別による差が見られなかったため、以降の分析については検討を行わないこととした。また、予備調査についても、その妥当性が確認されたといえる。

4.2 困窮事態の分類

本調査で得られたデータは対象者×項目×性質の 3 相データであったため、野﨑・石井（2004）にならって、対象者×項目の 2 相データに変換して分析を行った。調査では対象者 1 名に対し、42 項目それぞれについて 3 つの性質に関する質問への回答を求めたが、因子分析の際には、各項目への評定値をセットとして扱った。したがって、因子分析の対象となったのは 594 のデータとなった。42 の困窮事態に対して、探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った結果、因子負荷量および解釈可能性などから、4 因子が妥当であると判断した。

この結果に従って、Amos19 を使用し、共分散構造分析（構造方程式モデリング）を用いた確認的因子分析を行った。予備調査での 5 カテゴリーのうち、「忘れ物・落し物の問題」、「個人的な問題」に類似性が見られたため、4 因子を想定した。4 つの因子からそれぞれ該当する項目が影響を受け、すべての因子間に共分散を仮定したモデルで分析を行った。修正指標に従って修正を加えた結果、負荷量が有意でなかった 4 項目を除外した 4 因子モデルが採用された（χ^2（579）=1564.25, $p < .001$）。その結果を表 1 に示す。最終的な適合指標は、CFI = .90、RMSEA = .05、AIC = 1964.29、BCC = 1558.00 であり、モデルは適合していると判断した。本研究では、表 1 に示したように表を用いて、標準化推定値をまとめ、結果を示す。これは、パス図出力が複雑となり、見づらいためである。

第一因子には「何気なしに送ったメールを悪く誤解される」「友だちに無視されている気がする」など対人関係に関する困窮事態が多く含まれたため「対人関係の問題」と命名した。これに対して、第二因子には「人とうまく意思疎通できない」「コソコソ話で自分のことを言われていそう」など自身のコミュニケーションのスキルや自信の無さなどに関連する事態が分類されたため「対人スキルの問題」とした。さらに、第三因子は「授業で出された課題のやり方がわからない」などの講義や勉強に関する項目が集まったため「学業の問題」、第四因子には「買い物をしようと思ったが、財布を持っていない」など、毎日の生活におけるハプニングや困りごとが多く集まったため「生活上の問題」と命名した（表 1）。

表 1：因子分析の結果

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
対人関係の問題				
22 何気なしに送ったメールを悪く誤解される	.77			
41 友だちに無視されている気がする	.76			
24 友だちが心を開いてくれない	.70			
26 勘違いが原因で口論になる	.69			
7 グループ活動で協力してくれる人がいない	.66			
11 悩みを聞いてくれる人がいない	.65			
31 自分にできないことをやるように指示される	.64			
34 自分のまわりの友だち同士が仲良くない	.63			
29 自分の失敗で周囲に迷惑をかける	.61			
25 家族が自分の考えを理解してくれない	.59			
28 後輩への接し方がわからない	.59			
3 先輩への接し方がわからない	.54			
32 顔見知り程度の人から深刻な相談を受ける	.48			
対人スキルの問題				
18 人とうまく意思疎通できない		.79		
21 コソコソ話で自分のことを言われていそう		.71		
37 相手に言いたいことが言えない		.70		
20 グループから外されないよう行動しないといけない		.69		
8 意見を述べる際、何を言うべきか分からない		.68		
39 相手に自分から積極的に話しかけられない		.63		
17 苦手な人と活動しなくてはいけない		.50		
40 恋愛がうまくいかない		.47		
19 自分がどう思われているか分からない		.39		
学業の問題				
38 授業で出された課題のやり方がわからない			.79	
10 予習をしていなくて、先生からの質問に答えられない			.65	
36 筆記用具を忘れる			.64	
9 欠席した授業のプリントがない			.58	
35 先生の話している内容が難しくてわからない			.57	
1 授業で必要な資料を忘れる			.54	
30 パソコンソフト（ワードなど）の使い方が分からない			.53	
6 レポートのテーマが抽象的すぎて何を書いたらいいのか分からない			.52	
5 先生の話を聞き逃す			.37	
生活上の問題				
33 買い物をしようと思ったが財布を持っていない				.85
14 先約がある日時に、うっかり別の予定を入れる				.84
15 体調が悪くなる				.67
16 自分の将来に関して見通しが立たない				.62
2 雨の日に傘を持っていない				.59
12 借りようと思っていた本が貸し出し中で借りられない				.45
4 携帯電話の充電が切れる				.41
削除した項目：親しい友人から深刻な相談を受ける				
自分にはわからない話題で友だち同士が盛り上がっている				
初めて行く場所への道がわからない				
前の人が邪魔で板書の字が見えにくい				

注：$CFI = .903$, $RMSEA = .054$, $\chi^2 (579) = 1564.248$, $p < .001$

内的整合性を示す α は、順に .90、.87、.83、.77 であり、十分な値であると判断した。各因子について、経験頻度、困窮度、援助希求度のそれぞれについて項目平均を算出し、各困窮事態の得点とした（Range: 1-5）。

4.4 各変数の関連

得られた 4 つの困窮事態と、測定した 3 つの性質について、相関係数を算出した（表 2）。いずれの困窮事態においても、その困窮度と援助希求度の間に、有意な正の相関がみられ（$r = .18 \sim .38$）、困窮の程度が高いほど、援助希求度も高いことが確認された。また、性質ごとにみると、困窮事態それぞれにおける相関（頻度×頻度、困窮度×困窮度、援助希求度×援助希求度）はすべてにおいて、ばらつきはあるものの、ある一定以上の正の相関が確認された（$r = .22 \sim .81$）。

表 2：各変数間における相関係数

			a	b	c	d	e	f
a		頻度						
b	Ⅰ	困窮度	–.05					
c		希求度	.09	.36 ***				
d		頻度	.62 ***	.11	.09			
e	Ⅱ	困窮度	.04	.74 ***	.36 ***	.27 ***		
f		希求度	.17 *	.25 ***	.81 ***	.19 *	.38 ***	
g		頻度	.51 ***	.08	.14 *	.47 ***	.19 **	.16 *
h	Ⅲ	困窮度	–.08	.61 ***	.17 *	.07	.56 ***	.13
i		希求度	–.10	.38 ***	.55 ***	–.06	.31 ***	.34 ***
j		頻度	.44 ***	–.06	.00	.22 **	–.02	–.02
k	Ⅳ	困窮度	–.04	.59 ***	.19 **	.02	.55 ***	.14 *
l		希求度	.21 **	.14 *	.57 ***	.06	.19 **	.56 ***

			g	h	i	j	k	平均値	(SD)
a		頻度						2.27	(0.54)
b	Ⅰ	困窮度						3.80	(0.61)
c		希求度						3.14	(0.67)
d		頻度						2.87	(0.69)
e	Ⅱ	困窮度						3.68	(0.71)
f		希求度						2.89	(0.89)
g		頻度						3.13	(0.62)
h	Ⅲ	困窮度	.07					3.98	(0.63)
i		希求度	.11	.33 ***				3.96	(0.66)
j		頻度	.49 ***	–.09	.01			2.84	(0.62)
k	Ⅳ	困窮度	.09	.66 ***	.34 ***	.03		3.91	(0.66)
l		希求度	.15 *	.05	.29 ***	.00	.18 *	2.66	(0.81)

注：Ⅰ…対人関係の問題、Ⅱ…対人スキルの問題、Ⅲ…学業の問題、Ⅳ…生活上の問題
*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

4.5 困窮事態の特徴

分類された 4 つの困窮事態について、その特徴を明らかにするため、困窮事態（4）を独立変数、3 つの性質を従属変数とした被験者内計画の一要因分散分析を行った（図 1 ～図 3）。

まず、頻度において、困窮事態の主効果が有意であった（F (2.49, 482.82) = 121.61, $p < .001$, $\eta_p^2 = .39$）。多重比較（Bonferroni 法）を行ったところ、「対人関係の問題」が他の 3 つの困窮事態より有意に低く、「対人スキルの問題」が「学業の問題」より低く、さらに、「生活上の問題」は「学業の問題」より有意に低かった。（すべて $p < .001$）。人付き合いに関する困窮事態は、学業場面や日常的なトラブルに比べ、生活のうえでその経験頻度は低いことが示された。

次に、困窮度についても有意な差がみられた（F (2.64, 512.51) = 19.97, $p < .001$, $\eta_p^2 = .09$）。多重比較（Bonferroni 法）の結果、「対人スキルの問題」は他の困窮事態よりも困窮度が低く、「対人関係の問題」は「学業の問題」および「生活上の問題」より困窮度が低い（すべて $p < .001$）。

そして、援助希求度においても有意差が確認された（F (2.36, 459.53) = 223.34, $p < .001$, $\eta_p^2 = .53$）。「学業の問題」が他の事態よりも有意に高く、「対人関係の問題」は「対人スキルの問題」「生活上の問題」より高く、「対人スキルの問題」「対人関係の問題」「学業の問題」は「生活上の問題」より援助希求度が高かった（すべて $p < .001$）。

5. 考察

本研究の目的は、大学生における日常生活上での困窮事態の収集とその分類および構造化を行うことであった。他者または他の集団が困ったり悩んだりしている事態を「困窮事態」と定義したうえで、収集された 42 項目について行った因子分析の結果、困窮事態は 4 つのカテゴリーで構造化できることが明らかとなった。具体的には、「対人関係の問題」、「対人スキルの問題」、「学業の問題」、「生活上の問題」と命名した。先行研究では、対人関係に関する悩み事のみに着目したり（高井，2008）、学習場面に焦点を当てたり（野崎・石井，2004）、場面限定的な検討が行われており、包括的に構造化を行った点が非常に有

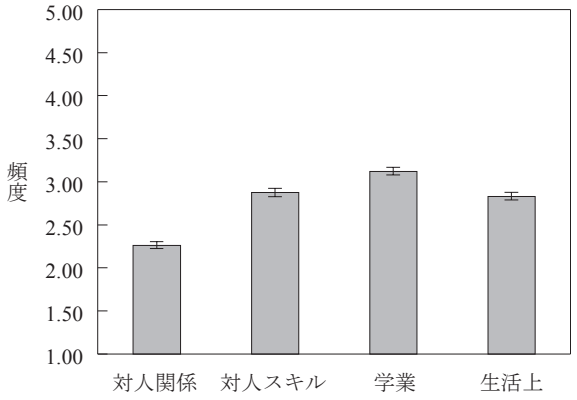

図 1：困窮頻度の平均
注：エラーバーは標準誤差を表す。

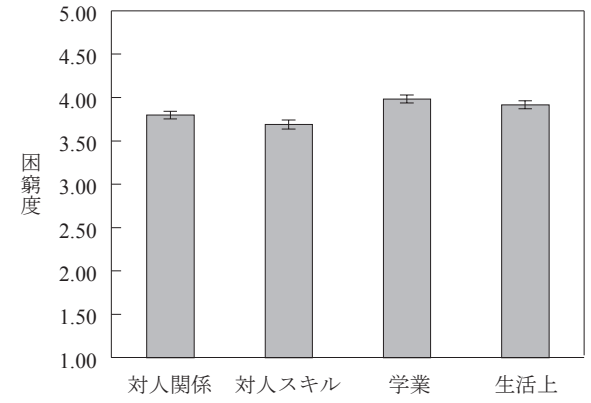

図 2：困窮度の平均
注：エラーバーは標準誤差を表す。

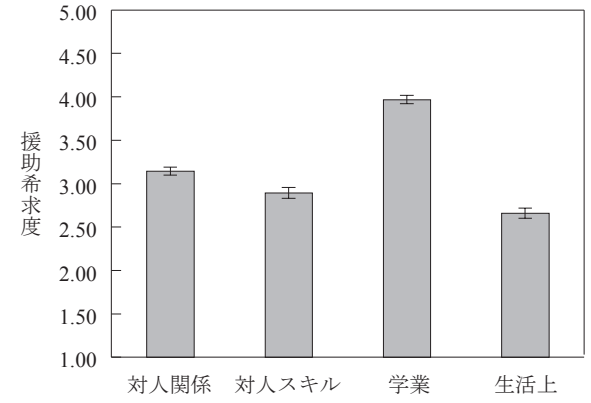

図 3：援助希求度の平均
注：エラーバーは標準誤差を表す。

意義であると言える。

さらに、分散分析の結果、4 つの因子はそれぞれ、経験頻度や援助希求度が異なることが示された。このように困窮自体の性質について比較を行った研究はこれまでになく、その性質に応じて、他者からのサポートの仕方にも多様性が求められることが示唆された。

5.1 困窮事態の多様さ

自由記述を用いた質問紙を実施し、KJ 法に類似した手法で分類した予備調査の結果、50 の困窮事態にまとめられた。なかでも、友人関係間のトラブルや、講義内容の難しさや課題への取り組みに対する困難感のほか、忘れものや落とし物といった必要物品の欠如に関する困窮事態が多くみられた。

菊島（2002）は、大学生が自覚するストレッサーとして友人ストレスや学業ストレスをあげている。今回の結果からも、大学生の多くは、日常生活で避けることのできない他者、とくに友人との関わりに関して、何らかの困難感を有していることが示唆された。また、学業に関する困窮事態についても多数の回答があり、先行研究と一致した結果であるといえる。

また、少数ではあったものの、「行きたい用事が重なってしまった」のような個人的な問題や、「交通の不便なところに行かなければいけなかった」のような環境的な不便さによる困窮事態なども挙げられており、さまざまな困窮事態に遭遇していることが示唆された。これらのことから、大学生の身の回りにある困窮事態は実に多様であり、実際に援助を受けたものや、援助要請したものに限らず、幅広く学生の困難感について扱う必要があると言える。

5.2 困窮事態の特徴

本研究において、困窮事態を 4 つの因子に分類し、包括的に構造化されることが明らかになった。これら 4 つの因子の特徴について検討するため、経験頻度、困窮度、援助希求度という 3 つの性質それぞれを従属変数とした分散分析を行った結果について、以下では分類で得られた 4 つの困窮事態ごとに考察を行う。

5.2.1 対人関係の問題

対人関係における困窮事態のうち、他者との関係形成、とくにコミュニケーション不全に起因すると考えられるものについては、「対人関係の問題」としてまとめられた。これは、ほかの困窮事態に比べ、経験頻度は低いものの、困窮度は高く、援助希求度も高いものであった。

ここに分類された事態は、生起する頻度は低いものの、困窮の度合いは高い（図 1 および図 3）ことから、困窮者自身およびその周囲による対処が必要であるといえるだろう。また、援助希求の度合いも他に分類された事態と比べると高いことから、彼らはこのような対人関係形成上で発生する事態について、他者からの援助を求めていることが示された。実際場面において、援助要請を行うかどうかはまた検討の余地があるが、少なくとも、第三者の介入を期待したり、介入されることで解決の可能性があると認識したりしていると考えられる。大西（2002; 2003）は、課題の重要度が大きく、組織内統制力が弱いときに第三者介入方略、つまり当事者以外の介入を求めるといった解決法が選択されやすいこと指摘している。本研究において「対人関係の問題」に分類された項目は、

大学生にとって重要度が高く、なおかつ仲間や同級生といった組織内統制力が比較的弱い集団での困窮事態であるため、第三者介入である援助を必要とする度合いが高いことが考えられる。

5.2.2 対人スキルの問題

対人関係における困窮事態のうち、困窮者自身が、自己のパーソナリティや能力に原因を帰属させているものを「対人スキルの問題」としてまとめた。ここには「自分がどう思われているかわからない」などの自己評価に過敏になる個人特性や、「相手に言いたいことが言えない」などのコミュニケーション能力の低さに関する事態が多い。青年期における人間関係の悩みに関する検討を行った高井（2008）は、悩みの内容として多いものから順に「性格領域」「対人スキル不足・コミュニケーションスキル不足」を挙げている。本研究で得られた人づきあいに対する自分自身の個人特性やコミュニケーション能力の低さに関する事態が、決して低くない困窮度と頻度を示した本研究で得られた結果と一致する。

ほかに比べ、頻度および困窮度、援助希求度は総じて低く、日常的にはあまり生起せず、困窮の度合いも低く、他者からの援助を望んでいない事態であるといえる。しかし、困窮度の素点は 3.61（Range: 1-5）と中点である 3 点より高く、「あまり頻繁に生じるものではないが、困る」事態であることがうかがえる。

同じ対人場面での困窮事態である「対人関係の問題」と比べると、困窮の原因が困窮者自身によって自己の能力やスキル不足に帰属され、外部介入により変容が難しいと考えられるものであることが多い。そのため、第三者からの援助を強く希求していないのであろう。また、他の困窮事態に比べて、どのような援助を期待し、要請すればいいかが分かりにくいものが多く、具体的な介入をイメージしづらいため、援助希求度が低い可能性も考えられる。しかし、コミュニケーション能力の未熟さなどは、現在広く用いられているソーシャル・スキル・トレーニング（名城・諸留，2011）などで向上は可能な側面もあり、大学生の「助けの必要はない」という認知を変化させる必要性が指摘できる。

5.2.3 学業の問題

大学での講義や、その予習や復習を含む勉強に関する項目がまとめられた「学業の問題」では、ほかの困窮事態より頻度が高く、困窮度も援助希求度もすべてが高い値となった。調査対象である大学生らは、日常生活の多くを大学での勉学に関する時間で過ごし、勉学に対する自我関与も強いため、このような結果となったと考えられる。

これまで大学生の悩みに関する研究の多くでは、対人関係に関することや自分の将来展望に関することが取り上げられることが多く、それらに対する支援策やサポートについての検討が行われてきた（本多，2009）。しかし、本研究の結果から、講義中または前後、勉学に関することも彼らの悩みや困りごとの一部として存在していることが明らかになり、その対応策について考える必要性がある。本研究で得られた「学業の問題」の項目内容をみると、「〇〇のために、勉強（講義）がわからない」といった記述に多くが占められており、受講者側の問題（講義に必要なものを忘れる、予習不足など）と授業の提供者側の問題（レポート課題が抽象的すぎる、講義内容が難しすぎる）に大きく分類できる。前者はメモを取るなどの自己解決や、必要品の貸し借りといった周囲の友人の協力によって困窮事態の回避が可能であるといえる。しかし、後者については、教員の意識変容や行動改善が必要だろう。課題や講義の内容を伝えた際、学生の反応が好ましくない場合はより深く説明を行ったり、より詳しく容易なレベルからの解説を加えたりするなど、教員側の努力によって、大学生の持つ困難感は軽減できると考えられる。もちろん、学生自身の自律的学習や学生同士の共同学習を行うなど、自主的な努力も必要であろうが、学生の習熟レベルに応じた講義展開や、課題についての適切な説明など、教員側の対応も求められているといえる。大学生の学力低下が指摘されて久しいが（市川，2002）、彼らが学業場面においてどのような困難事態に遭遇しているかを知り、その援助策を考察することは、さらに学生の学力や個々の背景が多様となることが指摘されている今日において、不可欠であるといえる。

5.2.4 生活上の問題

「携帯電話の充電が切れる」「体調不良」などの、生活上のハプニングやトラブルが分類された「生活上の問題」は、4 つのうちもっとも頻度が高かった。ほかの困窮事態が対人場面や勉強場面といった限定的なものだったのに比べ、それ以外のすべての事態を含有しているためであると考えられる。

しかし、困窮度は「学業の問題」より低く、援助希求度はもっとも低く認知されている。多くの事態は自らの不注意によって引き起こされていると考えられ（「雨の日に傘がない」など）、他者に援助を要請したり期待したりする前に、自力での解決や未然の防止を図ることが可能であることも、困窮度や援助希求度が低かった一因であろう。もっとも、さまざまな事態が含まれているため、項目ごとにおける得点の散らばり具合（項目ごとの標準偏差を算出すると、困窮度 SD = .96 ～ .1.21、援助希求度 SD = 1.24 ～ 1.41）も大きく、人によって困窮度や援助希求度に差異があることは考慮に入れておくべきではある。

また、このような日常的で個人的要素の強い困窮事態の場合、彼らが「自分の過失であるから、他者に助けを求めるべきではない」または「助けてもらえないはずだ」と認知している可能性が考えられる。現在の大学生は、他者との関係から退いてしまう「ふれ合い恐怖心性」をもっていたり、表面的には楽しく振る舞っても他者からの視線に気を遣っていたりすることが指摘されている（岡田，1993）。そのため、自らの準備不足などの「生活上の問題」によって発生した困窮事態においては、親密な関

係を形成していない他者に援助を求めるべきではないと考えているのではないだろうか。つまり、他者に弱みをさらすことを回避し、援助要請をすることを恥ずかしく感じている可能性が考えられる。援助を求めたり、受けたりすると相手に対する申し訳なさを感じ、自尊心が低減することも指摘されており（野﨑・石井，2004）、日常的なトラブルに他者の手を借りることは、大学生にとって難しいことなのかもしれない。

さらに、それと同時に、他者がこのような困窮事態にあることが確認できても、それに対して援助や支援を行おうという意識が向かない可能性が考えられる。中里・松井（1997）は、日本の青年が他者に対して思いやりを示そうとしない傾向にあることを示しているが、彼らに「思いやりがない」のではなく、そもそも何らかの困窮事態にある他者に対して、自発的に援助する必要性を感じていないことがその一因として指摘できる。このことは、本研究における質問紙の自由記述欄に、とくに援助希求についての項目に対するコメントが複数寄せられたことから推察される。一部を紹介すると、「困ったことはたくさんあるが、自分で解決していくべきことばかりなので、助けてほしいとは思わない」といったコメントや、「同じような状況でも人によって感じ方は違うので、困っていると言われなければ助けないほうがいいと思うし、自分も助けてほしくない」というものである。自他で困窮の度合いや感じ方が違うということを理解した上で、いわゆる「自分だったら手伝ってほしくないから」といった理由での援助を抑制している可能性がある。この点については、更なる詳細な検討が必要であろう。

5.3 本研究の意義と課題

本研究により、現代の大学生の日常生活において、さまざまな困窮事態が生起しており、さらに、それらはそれぞれに異なる特徴を持っていることが明らかとなった。これまで、向社会的行動や援助行動の対象となる困窮者についての検討はほとんどなく、どのような困窮事態に第三者からの援助を期待しているのかなどについて被援助者側の視点からの検討を行った点で、本研究の結果は意義深いと言える。精神的不適応を引き起こすほど深刻でなくても、日々の生活で困ったことや悩みを覚えることは多数生起する。しかし、そのすべてを自己解決することは難しく、周囲の援助が不可欠である。その援助の在り方を考える上で、困窮事態を整理・分類したことの重要性は高いと言えるだろう。

加えて、これまでに行われてきた、大学生に関する被援助者側についての研究は、カウンセリングなどの臨床現場におけるものがほとんどであり、何らかの社会的不適応への対応について述べたものが多い。しかし、本研究はいわゆる「適応的な」学生の困窮事態を対象とし、彼らの日常生活に焦点を当てる研究である。大きな問題を抱えずに大学生活を送っている青年らも、「ささいな」困窮事態に日々遭遇しており、その対処のために他者からの援助を必要としていることも多い。自ら援助要請ができない困窮者や、積極的に援助行動を起こせない周囲の人間らに対して働きかけるうえで、本研究は有意義であるといえるだろう。

今後の課題として、困窮事態の特徴と個人特性との関連の検討が挙げられる。同じ事態に遭遇しても、困窮を覚える度合いや、援助を必要とする程度は個人によって異なると考えられる。これは、被援助志向性や自尊心との関連により明らかにすることが可能であろう。また、倉元・大坊（2012）は大学生の他者依存的傾向を指摘しており、自分が他者に気遣う以上に配慮したふるまいを相手に期待し、さらに相手の表現能力が巧みであることを望む傾向にあると述べている。このことから、大学生は、相手が主張や表現を行い、それに自分が反応するといったコミュニケーションを理想としていることが考えられる。とくに、困窮事態にある大学生に対して何らかの援助を行う際には、困窮者が好意的に解釈しやすい、または、受容しやすいコミュニケーションを行う必要性がある。そのため、それぞれの困窮事態に応じた援助方略を検討していくことが望まれる。

謝辞

本研究の一部は、日本教育心理学会第 55 回総会にてポスター発表を行ったものを、再分析および加筆修正したものです。

研究実施およびデータ分析で補助していただいた大阪大学大学院人間科学研究科（当時）の坂香里さん、調査に参加していただいた大学生の皆様、ご協力いただいた教職員の方々に感謝いたします。

引用文献

相川充（1989）．心理的負債の大きさによる被援助事態の分類．宮崎大学教育学部紀要 社会科学，66，1-11.

千島雄太・水野雅之（2015）．入学前の大学生活への期待と入学後の現実が大学適応に及ぼす影響．教育心理学研究，63，228-241.

Eisenberg N. & Mussen P. (1989). *The roots of prosocial behavior in children*. Cambridge: Canbridge University. Press.（菊池章夫・二宮克美（訳）（1991）．思いやり行動の発達心理．金子書房）

Eisenberg N. (1979). Development of prosocial moral judgment. *Developmental Psychology*, 15, 128-137.

平井元（2001）．大学生の悩みの構造と、相談相手、学生相談への援助ニーズに関する研究―早稲田大学学生を対象としたニーズ調査の結果より―．早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊，9-1，21-31.

本多陽子（2009）．大学生が進路を決定しようとするときの悩みの進路決定に関する信念との関係．青年心理学研究，20，87-100.

市川伸一（2002）．学力低下論争．ちくま新書.

伊藤順子（2004）．向社会性についての認知はいかに行動に影響を与えるか―価値観・効力感の観点から―．発達 心理学研究，15(2)，162-171.

伊藤順子（2006）．幼児の向社会性についての認知と向社会的行動との関連―遊び場面の観察を通して―．発達心理学研究，17(3)，241-251．
金子劭榮・田村博久（1998）．思いやり意識の性差と因子構造．教育工学・実践研究，24，1-14．
菊島勝也（2002）．大学生用ストレッサー尺度の作成―ストレス反応，ソーシャルサポートとの関係から―．愛知教育大学研究報告．教育科学，51，79-84．
倉元俊輝・大坊郁夫（2012）．大学生のコミュニケーション・スキルの特徴に関する研究―ENDCOREs を用いた検討―．対人社会心理学研究，12，149-156．
中里至正・松井洋（編著）（1997）．異質な日本の若者たち―世界の中高生の思いやり意識―．ブレーン出版．
松浦均（2006）．援助場面における援助者と被援助者との状況認識の相違について．東海心理学研究，2，3-19．
宗方比佐子・二宮克美（1985）．プロソーシャルな道徳的判断の発達．教育心理学研究，33，157-164．
名城健二・諸留華英（2011）．大学生に対する SST（ソーシャル・スキルズ・トレーニング）の効果について．沖縄大学自分学部紀要，13，65-72．
野﨑秀正・石井眞治（2004）．抑制要因に基づく大学生の援助要請行動の分類．広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部，53，49-54．
岡田努（1993）．現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係．発達心理学研究，4，162-170．
大西勝二（2002）．職場での対人葛藤発生時における解決目標と方略．産業・組織心理学研究，16，23-33．
大西勝二（2003）．職場で発生する対人葛藤時に使用する方略に関する研究―統制力と課題の重要性の及ぼす影響―．経営行動科学，17，77-83．
桜井茂男（1986）．児童における共感と向社会的行動の関係．教育心理学研究，34，342-346．
三宮真智子（2004）．思考・感情を表現する力を育てるコミュニケーション教育の提案―メタ認知の観点から―．鳴門教育大学学校教育実践センター紀要，19，151-161．
庄司正美（2011）．心理学系大学新入生における大学生活への適応感と満足感に関連する要因．目白大学心理学研究，7，15-27．
高木修（1987）．順社会的行動の分類．関西学部社会学部紀要，18，67-114．
高井範子（2008）．青年期における人間関係の悩みに関する検討．太成学院大学紀要，10，85-95．
竹ノ山圭二郎（2005）．病人および酔っぱらいの転倒に対する援助における状況の重大性と原因帰属の影響．実験社会心理学研究，44(1)，42-53．
谷口淳一（2012）．援助行動の意図性と特定性が好意伝達の可否に与える影響．対人社会心理学研究，12，135-141．
上原依子・青柳肇・釘原直樹（2011）．対人感受性が苦境場面におけるサポート者への評価におよぼす影響，電子情報通信学会技術研究報告．HCS，ヒューマンコミュニケーション基礎，11159，195-200．
横塚怜子（1989）．向社会的行動尺度（中高生版）作成の試み．教育心理学研究，37，158-162．

（受稿：2015 年 12 月 16 日　受理：2016 年 5 月 25 日）